

P2-063

中学・高校生の歯肉炎に関する疫学的研究
～第一報 歯肉炎と口腔衛生習慣との関連～浅香 有希子¹、大畑 直子¹、棚瀬 康介¹、
佐野 哲文¹、荻原 孝¹、佐野 正之²、渡部 茂¹¹明海大学 歯学部 形態機能成育学講座 口腔小児科学分野、
²あすなろ小児歯科医院

【目的】

歯肉炎の予防・治療には、歯科保健指導が極めて重要である。一方、身体的には第二次性徴、精神的には第二次反抗期といった大きな変化をとげる思春期の歯肉炎は、指導成果をあげにくいといわれている。そこで演者らは、思春期歯肉炎について疫学的アプローチで新たな歯科保健指導方法確立を目指し研究に取り組み始めた。思春期の中学生・高校生を対象に、口腔内診査による歯肉炎状態の把握、日常生活行動・口腔衛生習慣・口腔保健に対する意識についてアンケート形式にて調査し、生活習慣、健康観の相違が歯肉炎の発症にどの様に関連があるかを分析・検討を行った。

【対象・方法】

富山市A小児歯科医院を受診し、調査について文書、口頭にて説明し、同意を得た中学生・高校生の健康な男女児計302名を対象とし、口腔内診査と質問紙記入にて調査した。口腔内診査は、小児歯科専門医2名が担当し、歯肉炎の評価は、Silness & LoeのGIをモディファイした方法にて行った。質問項目は、日常生活行動、口腔衛生習慣、口腔保健について計21項目にわたって来院時、患者自身にアンケート用紙に記入してもらった。口腔内診査の結果、GIの値が1だった者を無所見者、その他の値だった者を有所見者と2群に分け、アンケートのそれぞれの質問項目に対する回答との関連を統計解析ソフトのSPSSを用いた χ^2 乗検定で分析を行った。

【結果・考察】

歯肉炎の有無と日常生活行動、口腔保健に対する意識との関連性は認められなかった。口腔衛生習慣においては有意ではないが境界有意を認めた。歯磨きをしない日がある者より毎日歯磨きをする者、1日1回より複数回歯磨きをしている者、歯ブラシを半年以上交換しない者より数か月で交換する者、デンタルフロスを使用していない者より使用している者の方がそれぞれ無所見者が多い傾向にあった。今回の対象者は年齢が低いことと当医院に定期的に来院していることもあって、重度の歯肉炎の者がいなかったため、明確な差が出なかったと考えられる。思春期歯肉炎の予防・治療には、口腔衛生習慣を改善する教育・指導が重要なカギとなることが推察された。

P2-064

本院小児歯科における口腔軟組織疾患を
主訴とした初診患者の実態調査高橋 紗耶、白瀬 敏臣、岩崎 てるみ、
梅津 糸由子、内川 喜盛

日本歯科大学附属病院 小児歯科

【緒言】

小児の口腔軟組織疾患は該当部位の問題に加えて、歯列・咬合や口腔機能の発育を阻害するケースも少なくない。そのため保護者の関心も高く、診療にあたり適切な状況説明を必要とする。

【目的】

近年における都心に位置する附属病院小児歯科における口腔軟組織疾患の傾向を知ることを目的として、口腔軟組織疾患を主訴に来院した初診患者の実態調査を行った。

【方法】

対象は、2012年4月から2015年3月までの3年間に口腔軟組織疾患を主訴に日本歯科大学附属病院小児歯科を受診した165名の患児とし、診療録をもとに調査を行った。調査項目は1.主訴の割合、2.性別、3.初診時年齢、4.紹介の有無、5.疾患名、6.対応等とした。

【結果】

1. 初診患者のうち口腔軟組織疾患を主訴に来院した患者の割合6.8%であった。
2. 性別は、男児95名(57.6%)、女児70名(42.4%)であった。
3. 初診時年齢は生後17日から14歳2か月で、7歳児が28名(17.0%)で最も多く、次いで6歳、5歳の順であった。
4. 4歳以下の低年齢児も一定数みられたが、8歳以降では少なかった。
4. 紹介の有無は、紹介有りが121名(73.3%)、紹介無しが44名(26.7%)であった。
5. 疾患名は、1.舌小帯の異常41名(24.8%、平均年齢4.8歳)、2.上唇小帯の異常37名(21.8%、平均年齢5.3歳)、3.粘液嚢胞31名(18.8%、平均年齢4.9歳)の順で多かった。
6. 対応としては、経過観察(95名)が最も多く、次いで説明(47名)、処置(13名)、口腔外科への対診(9名)、転科(1名)の順だった。

【考察】

当院では口腔軟組織疾患を主訴に受診する患者は7歳以下の患児に多く、この理由として低年齢による精査、処置依頼を紹介されるケースや、毎日の口腔清掃を介助する保護者により疾患が発見されやすいことが理由に挙げられる。疾患により年齢的な特徴が見られ、舌小帯の異常は7歳以下の年齢で幅広く受診していたが、実際の処置に関しては構音機能が確立する5歳での処置が最も多く、2歳以下では見られなかった。また、上唇小帯の異常は永久前歯が萌出する5歳から7歳での来院が多く、処置に関しても同年齢で行うことが多かった。小児歯科医には口腔軟組織疾患における診断や治療時期を判断する能力の向上の必要性があると考えられた。